

階級社会学における 「中間層」研究の理論的課題

II ソビエト「中間層」論の諸問題

小 関 三 平

1. 「中間層」研究の問題意識

すでにふれたように、⁽¹⁾マルクス主義的原則に立脚するソビエトの「中間層」研究は、近來とみに活発化の兆しをみせているが、それらに共通な＜柱＞ともいべき主要な問題領域は、大別して、

- (1) 西欧社会学における「中間階級」論にたいする批判
- (2) 資本主義社会における「中間(的諸)層」の現状についての分析
- (3) 労働者階級と中間層の「反独占」統一闘争の客観的基礎の検討

の三つに分けられると考えてよい。(1)は、もっぱら階級概念の定義と中間層内部の等質性の評価をめぐるものであり、(2)は、新旧両中間層の量的増減とその社会経済的背景、および「両極化」と「プロレタリア」の傾向を中心として論ぜられ、(3)は、労働者階級と中間層の利害の共通性を検討し、両者の「政治的同盟」の可能性と現実性という実践的問題に及んでいる。

もっとも、同じくマルクス主義的「中間層」理論といっても、細部に亘れば若干の論争点をふくみうるものであり、＜完全な一致＞は、ソビエト内部でも、国際的なレベルでも、おそらくないであろう。だが、共通の原則というものも当然認められる。ここでは、さしあたって、そうした＜共通原則＞らしきものを端的に反映・要約していると思われるΓ.М.・アンドレーエヴァ（モスクワ大学）の短い論文「改良主義的＜中間階級＞理論にたいするマルクス・レーニ

ン主義の闘争」(1963⁽²⁾)を中心としてとしてとりあげ、それを通じて、現代階級理論にとっての「中間層」問題の意義を探りつつ、そこに横たわるいくつかの理論的諸問題の所在を明らかにして、われわれ自身の足場を築き固める手が必要⁽³⁾としたい。

もともと階級理論における「中間層」問題なるものは、マルクスの＜基本的二大階級＞説に対するアンチテーゼとしての「中間階級」論によって刺戟され、にぎやかな論争の対象となってきたのである。したがって、ソビエト社会学者にかぎらず、一般にマルクス主義者の「中間層」論は、まず、「ブルジョワ社会学」的「中間階級」論にたいする認識と批判から出発するのを常とする。しかし、最近ようやくマルクス主義者の間で定着した感のある「中間層」への関心は、広汎な反独占統一闘争の強化という実践上の積極的な要請によっても、動機づけられている。しかも、この戦略上重要な意義を持ちつつある「中間層」に対して、ブルジョワ社会学的「中間階級」論は、有害なイデオロギイ的幻想をふりまき、労働者階級との連帯の強化をためらわせようとする。そこで、それだけにますます、「中間階級」論の幻想と欺瞞を暴露することが、緊要な課題となるわけである。

アンドレーエヴァもまた、そうした問題意識に立って論を始める。1957年のモスクワ宣言、1960年の共産党・労働者党代表者議会の声明、1961年のソ連邦共産党綱領など一連の歴史的な文書において、「中間層の役割と位置にかんする問題」が「現代の一般的諸特徴との密接な関連において吟味されている」ことに注意を促しながら、アンドレーエヴァは、中間層が「反独占統一戦線」における重要な勢力をなすことを認め、「中間層」問題が「今や特別に重大な意義を有する」と判断する。というのも、それは、なによりまず、「平和と民主主義と社会主義を目指す反独占闘争における、プロレタリアートの政治的同盟者(политические союзники)にかんする問題」にほかならないからである。

とはいえ、資本主義に対する中間層の態度は、「どっちつかずで矛盾した」ものであり、一部は、「一定の条件の下で、独占ブルジョワジーの影響を受

け、その予備軍（резерв）として現われる」のである。そこで、ブルジョワ・イデオログたちは、こうした中間層の性格を十分に考慮しつつ、それをプロレタリアートの指導下にある闘争から引き離そうとして、現代中間層の状態に実際に起りつつある変化について「わざとらしい論議」をし、「中間層の理想と社会主義的理想の間にまるで本当に存在するかのごとき＜非両立性（несовместимость）＞」を証明しようとするのである。⁽⁴⁾

いわゆる「中間階級」説は、実は、こうしたブルジョワ・イデオログによる反社会主義的なプロパガンダにとって、一つの理論的支えを提供するものにはかならない。というのも、それが、資本主義の階級構造についての「マルクス主義的分析は時代遅れ」であり、「新しい諸現象は＜マルクスのシェーマ＞にはおさまきれない」と、それが証言するからである。⁽⁵⁾ しかもさらに進んで、このいわば＜新しい原理＞に立つ階級理論は、「中間階級」の増大による無階級社会への転化という「幻想的な見通し」を立て、資本主義社会の発展の過程で、ブルジョワジーとプロレタリアートの対立は消滅すると主張する。だからこそ、「現代の修正主義者たちは、好んで、その主張をこのドグマから借りてくる」のである。ソ連邦共産党綱領が明らかに指摘するように、「真の日和見主義」というものは、自己の観念を＜最新の＞ブルジョワ的理論に折衷主義的に結びつけて、「ブルジョワ社会における敵対的諸階級と階級闘争の存在を否定し、プロレタリア革命の必然性に対して、また、生産手段の私的所有の廃絶に対して反対する」ものなのである。⁽⁶⁾ その意味で、こうした「中間階級」説がブルジョワ社会学のみならずブルジョワ政治学の「公式の教義の一つとなった」ことは、むしろ当然のことといえよう。⁽⁷⁾

アンドレーエヴァ論文の出発点に横たわる問題意識は、このようなものとして要約される。そこから次には、ブルジョワ的「中間階級」論に対する批判にとりかかるわけだが、その際アンドレーエヴァは、最近の内外マルクス主義者たちの多くの労作が、「国際共産主義運動の諸文書中に提起されている、資本主義社会の中間層の位置と役割についてのもっとも重要な理論的諸問題の検討」とともに、「この問題についての現代改良主義者および修正主義者の見解の暴

露」にあてられていることに注意を払っている。⁽⁸⁾ その場合とくに名を挙げられているのは、ソビエトでは、セミヨノフ、チェブラコフ、シュネールソン、外国ではグラント（英）とドリーユ（仏）であり、とりわけ後の二者は、⁽⁹⁾ 頻繁に引用されている。

註 (1) 「論集」11巻 2号、13～14頁

(2) Г. М. Андреева; Борьба марксизма-ленинизма против реформистской теории «среднего класса» (М.Т. Иовчук и пр., ред.; Против современной буржуазной философии. (Изд-во Московского университета, 1963)

(3) アンドレーエヴァのこの論文についての紹介と、そこに含まれる問題の一部についての指摘は、日本社会学会第37回大会（東京都立大学、1964年9月）における報告「現代階級理論と＜中間層＞問題」の中で行なった。
本稿は、それをさらに詳説することをめざすものである。

(4) Андреева, указ. соч. стр. 129～130

(5) Там же. стр. 128

(6) Там же. стр. 130

(7) Там же. стр. 128

(8) Там же. стр. 131

(9)① В. С. Семенов; Миф о «средних классах» и капиталистическая действительность (Вопросы Философии, 1957, V, 田沼肇編「現代の中間階級」(大月、1958)所収)

② В. С. Семенов; Антинаучные теории о классах и классовой борьбе в современной буржуазной социологии. (Коммунист, No. 3, 1958)

③ В. С. Семенов; Проблема классов и классовая борьба в современной буржуазной социологии, (Госполитиздат, 1959)

④ В. Чепраков; О классах современного капиталистического общества (Коммунист, No. 5, 1959)

⑤ А. И. Шнеерсон; Городские средние слои при капитализме. (Изд-во ВПШ и АОН, 1961)

⑥ Академия Наук СССР; Городские средние слои современного капиталистического общества. (Изд-во АН СССР, 1963)

⑦ R. Delille; Les classes moyennes en France (Economie et Politique, Août-Sept. 1955, 1956 田沼肇前掲書所収)

⑧ A. Grant ; Socialism and the Middle Classes (Lawrence & Wishart, 1958, 西村勝彦・長谷川善計「社会主義と中間階級」、理論社、1959)

ただしこれらの文献は、② ④ ⑤ ⑥ をのぞいて入手できなかった。① ⑦

⑧ については邦訳に依存したが、⑤ ⑥ については、部分的にのみ参照したに止まり、別の機会に詳しくとりあげたい。

2. 「中間階級」イデオロギーの批判

ブルジョワ社会学的「中間階級」論に対するマルクス主義的批判の第一点は周知のように、なによりまず＜中間階級 (middle class, средний класс)＞という概念の定義そのものに向けられる。この問題は、古くから決定的な意義をもつ論点とされてきたものだが、戦後ソビエトの学界でもっとも早くからこれを取りあげていたのはセミョーノフと思われる。その際、セミョーノフは、「ブルジョワ的「中間階級」神話」の宣伝者として、センターズ、バーナード、マーシャル、ビュープ、グレイソン(アメリカ)、クロスランド、コール、モード、リュウイス、イラーシック、ホデキン、ダヴィドソン(イギリス)、ポルト、シェルスキー(西ドイツ)、ハーヴェマン(デンマーク)、セレ(フランス)などの名を挙げている。これらの西欧学者の中には、われわれが寡聞にして知るところのない者も含まれており、それらの間の細かい相違は今後検討する必要があるが、これらブルジョワ社会学者の主要の欠陥は、「階級区分の唯一の客観的基準——生産手段にたいする関係」を無視して「中間階級」の概念を「まったく恣意的に」構成するという点にあると、セミョーノフは見ている。この恣意的な定義によると、「中間階級」の中に「資本主義社会のほとんどすべての階級と社会的グループがふくまれてしまう」ことになる。かくて——とセミョーノフは言う「シェルスキーは一筆のもとに西ドイツ全体を＜中間階級の社会＞に変えてしまった」のであり、この＜「中間階級」神話＞は、「＜人民資本主義＞というブルジョワ的公式の基礎によこたわって」おり、一連の資本主義国、とくにアメリカの「公式の国家的教義にまでたかめられている」のである。他方、イギリスのグラントは、⁽¹⁰⁾「社会を、客観的な基準によ

て客観的な用語で定義しうるような相対立する階級に区分するという考えを否定する風潮」を指摘して、とくにモードやセンターズの定義にふれながら、これらの定義はすべて「主観的な判断を強調し、それ以外のものには、ほとんど基礎をおいていない」と批判し、客観的メルクマールとして<職業>を選ぶコールの主観主義的階級概念批判をも援用している⁽¹¹⁾。

アンドレーエヴァの場合も基本的にはこれらの批判と同じであることは云うまでもあるまい。ただ、現代のブルジョワ社会学におけるもっともポピュラーな概念の一つたる「社会的成層」にふれているところに、一つの特色がある。彼によれば、改良主義および修正主義的理論は、「社会の階級的構造の分析を<社会的成層 (стратификация)> によっておき代えること」を提案するブルジョワ社会学者の「尻馬に乗っている」のである。そして、この<社会成層論>なるものの方法論的基礎は、階級の定義のための「科学的な基準」から背離して、「社会的発展の物質的、客観的合法則性の解明に対する実証主義的否定」をなすことにある。この<社会的成層>論においては「<層(страт)>——層(слой)の定義への気紛れで主観的な基準の導入」がみられるのだが、それこそが、「中間階級」という特殊な概念の恣意的な構成を許容するのであって「中間階級」の境界や範囲の規定が人に応じて「はなはだしく多様であまい」なもの、そこに由来している。そして、アンドレーエヴァはグラントとはやや異って、例のコールの「長いリスト」の中に「極端な雑多さ」を見て、コールもその他の右翼社会民主主義者もいずれもともに「非科学的な概念を操り続けて」いると指摘する⁽¹²⁾。

このアンドレーエヴァの例示のしかたはいささか<十把一からげ>的ななきらいがあり必ずしも適切なものとは思われない。というのは、一口に<非マルクス主義的>あるいは<ブルジョワ的>な階級論といっても、厳密に言えば多様であり、たとえば、<帰属意識>という純然たる主観的因子に依存するセンターズ説、<職業>という一応客観的な因子を重視するコール説、<社会的勢力>の連続的差異に応じて階級を区分する高田説、<所得>や<職業>といった客観的な因子と地域社会における<評価 (evaluation)>をミックスするウ

オーナー説、そこから発展していっそう多元的な複合指標にもとずいて数量化を徹底する一連の社会的成層論——これらの間には、若干の相違が存在するからである。

だが、いずれにしても、これらのブルジョワ社会学的階級論の諸類型相互間に見られる相違は、それら全体とマルクス主義的階級論の間の相違に比べれば、あくまで二次的なものにすぎないといえる。そしてまた、現代のブルジョワ社会学的「階級(または階層)」論のなかでも、とくに＜社会的成層＞論がもっとも新しく、またもっとも有力であるということからすれば、アンドレーエヴァのみならず一般のマルクス主義者がとくにこれを批判の対象としてとりあげるのも、まったく当を得たものと云わねばならない。わが国でも、すでに野崎治男や小山陽一の緻密な批判が現われているが、⁽¹³⁾ ソビエトでも、アンドレーエヴァよりももっと明確詳細な＜社会的成層＞論批判が行なわれはじめている。たとえば、アレクサンドロフ他による集団労作の中で、Г. В. アルダーエフと А. Б. ヴェーベルは、ブルジョワ社会学者たちが「まるで不平等の維持が社会の存続にとって＜機能的に不可欠＞であるかのように正当化しようと試みて」おり、現代ブルジョワ社会学者——とりわけ社会の階級的区画の研究者にとって「重要な指針の一つ」をなす＜社会的成層＞論は、結局のところ、こうした不平等の正当化の試みにほかならないと断じている。そして、フェアチャイルド編の「社会学辞典」(1958)における＜社会的成層＞の定義に論及しながら、ブルジョワ社会学においては、第一に、階級が単に社会層(социальный слой)の一形態とみなされ、第二に、＜層＞の概念が客観的な基準を欠くという点に、⁽¹⁴⁾ 主要な欠陥を見出している。

要するに、ブルジョワ的「中間階級」説なるものは、細部に亘れば相違を示すとしても、一般に次のような特徴をそなえている点で、マルクス主義の側から批判をこうむらざるを得ない。

- (1) 生産手段との関係を見捨てた階級概念にもとずいている。
- (2) ブルジョアとプロレタリアートの対立と闘争を不当に軽視する。
- (3) 二大階級のいずれとも利害を異にする独立の「中間階級」を肯定する。

(4) 「中間階級」の比重の漸次的増加に伴う階級対立の鈍化を想定する。

このような基本的特徴によって、「中間階級」論なるものは、現体制の維持にとって重要なイデオロギー的貢献を果たす。そうした理論は、それを支持し主張する論者個々の自覚的な＜意図＞とはかかわりなしに、客観的な＜結果＞として、プロレタリアートを中心とする 広汎な反独占統一闘争を通じて資本主義的階級関係の廃絶と社会主義の建設への道を切り開こうとする運動の発展を、なんらかの程度において妨げるのである。

しかもこの「中間階級」論の＜反動的＞な性格は、それが通常公然たる＜マルクス批判＞に熱意を示すことによって、いっそう強められる。もちろん、これも決して新しい問題ではなく、すでに19世紀の末に「中間階級」論争の口火をベルンシュタインがきった時に始まっているが、今日では、いっそう多くの社会改良主義的理論家によってもっとも好まれるテーマの一つとなっている。たとえばイギリス労働党のクロスランドは、「それぞれ結束した同質性をもつ二つの階級が、はっきりと相互に対立しているという古典的マルクス主義者の構図とは反対に、われわれのみる社会は、中間階級がしだいに増大している複雑な構造をもっている」と言い、同じくダービン⁽¹⁵⁾は、ブルジョワジーとプロレタリアートの間に介在する階級が「ひき臼の上・下をなす他の二つの階級のあいだにあって、すり碎かれる運命」にあるという考え方が、「共産党宣言」にあると解釈した上で「一般的な事実として中間階級は最近いかなるひき臼にもかけられていない」で、逆に「繁栄し、増大してきた」ことをもって、マルクスの「根本的な誤り」が立証されるとみなしている。これと同じ見解は、いちいち引用するまでもなく、多くのブルジョワ社会学者の間に広く認められる。

したがって、通常マルクスに帰せしめられている＜両極化 (polarization)＞あるいは＜二分法 (dichotomy)＞の問題が、あらためて重要な論点となるわけである。つまり、言いかえれば、マルクスにおける「中間階級」観についての解釈の吟味が、大きな意義をもってくるのであり、もちろん、この問題の検討はかなり複雑な作業を要するものである。

アンドレーエヴァは、まず労働党の理論家たち——したがってまた多くのブ

ルジヨフ的「中間階級」論者が、

- (1) 資本主義社会の階級構成には「一連の介在的な中間諸層 (ряд промежуточных средних слоев)」が含まれるかどうか、
- (2) この中間的・介在的な諸層が全体として「一つの統一的な〈中間階級〉 (единый «средний класс»)」をなすかどうか、

という二つの問題を混同していると指摘する。(1)にかんしていえば、グラントもドリーユも強調するように、マルクスとエンゲルスの古典的著作のどれ一つといえども、「社会の階級構成を二つの基本的階級のみ存在に還元したりしていない」のであって、実際にマルクスとエンゲルスは、「中間階級」という概念や「中間層」という概念に用いている。こうした指摘は、セミヨノフも行っているが、アンドレーエヴァはさらにはっきりと、「まるでマルクスが中間層の存在を否定したかのようにいうまったくの神話」は、「マルクス主義の露骨な偽造」にすぎないと指摘し、なによりまずこの神話の暴露にこそ「中間階級」理論に対するマルクス主義者の批判の功績があると認めている。⁽¹⁶⁾

ただし、問題は、マルクスやエンゲルスの云う「中間階級」あるいは「中間層」の具体的な意味内容にあって、この点にかんしては、セミヨノフも、「マルクスとエンゲルスは、分析される具体的状況におうじて異なった内容を含めていた」ことを認めている。⁽¹⁷⁾たとえば、「イギリスにおける労働者階級の状態」の序文中でエンゲルスが「中間階級 (Mittelklasse)」というとき、それは、彼自らが断っているように、貴族とは異なる所有階級としての bourgeoisie と同じ意味であり、こうした用語法は、封建的階級が完全には消滅していなかった初期資本主義の時期においても、やはり伝統的に使われていたのである。しかし、発展せる資本主義社会の階級構成になると、もはや、bourgeoisie は支配階級となっており、「中間階級」などと呼ばれることができない。そこで、この場合には、マルクスとエンゲルスは、「資本主義にあっては絶えざる分化に直面する社会層たる小ブルジョワジー」を指して、〈中間的〉または〈介在的〉な層という語を使っているのである。しかし、だからといって、彼らは、社会の階級的構成が二つの基本的階級のみに還元しつくされるなどとい

う結論を出しはしなかった。アンドレーエヴァの解釈に従うと、それは

- (1) 小ブルジョワジーの分化にもかかわらず、まさに同時に、資本主義経済は、この層の新しい成員をつねに生み出す。
- (2) 資本主義社会における中間層は、その中に、単に小ブルジョワジーのみならず、職員層 (служащий) やインテリゲンチヤその他のような一連の他の社会集団をも含む。

という二つの理由にもとづくのである。⁽¹⁸⁾ この中間層の第二の部分を、ブルジョワ的・改良主義的理論家たちは通常、小ブルジョワジー＝「旧中間階級」と対置しながら、「新中間階級」と呼んでおり、その成長増大を正しく見通さなかったという責めをマルクスに帰せしめているところのものである。しかし実際には、マルクスはこの層についてもその増大をある程度予想していたし、また、資本主義社会の現代的発展がこの層の成長をとくに激しいものにすることは事実であり、レーニンもこのことに注意を払ったのであって、「このことの無視をマルクス主義の責めに帰せしめるべきいかなる理由もない」と云わねばならない。なるほど、マルクスは、「新中間階級」などという概念を用いしなかったが、アンドレーエヴァはこの点を「マルクスは、職員層、インテリゲンチヤ、操作員 (обслуживающий персонал) などの諸集団が、また別個の＜新中間階級＞なるものを構成するとは決して考えたことがなかった」という「単純な理由」によって説明しようとしている。⁽¹⁹⁾ しかし、われわれはむしろ、マルクスがこの層の内部的異質性に注意したからというよりは、当時この層は小ブルジョワジー（つまりマルクスがしばしば「中間階級」と呼んだもの）に比べてあまりに小さな社会的カテゴリーをなすにすぎず、それを独立せる一個の＜階級＞とみなすことなど思いも及ばなかったであろうし、基本的にはこの層も上下に分化を強め、ブルジョワジーかプロレタリアートのいずれかに帰すると考えたからであろうと解釈する。また、今日いうところの「新中間階級」と「旧中間階級」をあわせて一体として「中間階級」と呼ぶことなど、彼の階級概念の定義そのものから考えてみれば、ナンセンスでしかなかったのである。この意味からすれば、いずれにせよ、マルクスが、今日のブルジョワ的

「中間階級」論者が云うような雑多な諸要素の全体を、統一的に「中間階級」などと呼ぶことは、ありえなかったのである。したがって、労働党の理論家たちが「混同」としてアンドレーエヴァが指摘した先述（前節9頁）の「二つの問題」のうち、(2)についても、マルクス及びマルクス主義者の見解は明かであり、「中間的・介在的な諸層」の全体を「一つの統一的な＜中間階級＞」などと呼ぶことは、到底できないのである。

このようないわば中間層内部の＜異質性＞は、ブルジョワ的「中間階級」論批判に際して、マルクス主義者がしばしば強調するところである。たとえば、ドリーユは「中間階級」という概念が内包する社会的現実——つまり社会構造の中に＜中間地帯＞があるということ——の存在を承認しつつも、この＜中間的な＞部分の状態・役割・前途などを「総括的に」評価することを不可能と考える。この＜中間部分＞の各要素は、それぞれ「比較的に等質の、まとまった一集団」をなすにしても、互いに「異なった基盤」に立ち、「異なった経済的利害」によって動かされており、「この異なった経済的利害を細部にわたって分析すること」こそ、社会闘争における彼らの役割を理解するために必要であると彼は強調する。⁽²⁰⁾ またグラントは、基本的な二大階級の間に、「現在そのいずれの階級にも属さず、また生産手段にたいしてなんら共通の関係ももたない種々さまざまの中間のグループ」が存在することを認め、その総体は、「中間階級」ではなく「中間(諸)層 (middle strata)」と呼ぶべきであると主張する。⁽²¹⁾ このような用語は、今日のマルクス主義者の間で一般化している。もっとも、いわゆる「旧中間層」を指して「中間階級 (classe moyenne)」と呼ぶ伝統的・日常的用語法は、とくにフランスあたりでは根強く残っており、それだけに、ドリーユのみならず、ブーヴィエ＝アジャムとミユリーなどのマルクス主義者は、「中間階級」概念を必ずしも全面的には否定していない。⁽²²⁾ このことは、マルクスがこれと同じ用語法を用いたという事実とあいまって、今後いっそう検討を要するであろう。しかし、もしこの用語法を承認すれば、グラントによる先述の「中間層」の定義のうち「いかなる階級にも属さず」という部分は、妥当性を欠くことになる。また、グラントのみならず、一般にマルクス

主義者の間では、「基本的な二大階級」以外にいわば＜副次的な＞階級の存在を認めるかどうかということが、必ずしも明かでないし、そもそも＜階級＞と＜層＞の概念的区別があいまいなままに残されているくらいがある。これらの点は、一見重要でない概念論議のようにみえるが、マルクス主義の階級理論のリファインメントにとっては、必ずしも瑣末なことではあるまい。

だがいずれにせよ、マルクス主義的見地に立つとき、ブルジョワ社会的「中間階級」なるものを、統一性をもった一つの＜階級＞とはみなしがたいことは、いうまでもない。アンドレーエヴァは、グラントとドリーユを引用しながら「中間階級」概念をめぐる論争は、単に用語法上の問題ではなく、「方法論上の意義を有するはなはだ重大で原理的な問題」にかかわると指摘し、中間層の各構成要素が、一定の生産組織の中で、「その特殊な地位を、したがって政治的闘争におけるその固有の位置を占める」ゆえに、「それぞれの集団の状態の具体的分析」が、中間層の政治的位置づけにとって重要であると主張する。こうした「中間層の現代的状態のマルクス主義的分析」は、「階級構造の真の科学的分析」を与えることになり、「プロレタリアートの階級闘争の実践的必要に応ずるもの」である。なぜなら、それが、＜中間階級の増大＞に伴って＜階級構造の変化＞が生じ＜権力の再配分＞が可能となるといった類のブルジョワ的イデオロギーを、その方法論上の欠陥とそれから生ずる反動的な政治的結論の批判を通じて、暴露することを可能にするからである。⁽²³⁾

註 (10) Семенов, 前掲訳書、264～266頁

(11) Grant, 前掲訳書、9～13頁

(12) Андреева, Указ. соч. стр. 131～132

(13) 野崎次男「成層の普遍的必然性に関する機能理論の抽象性」（社会学評論、38号、1960年3月）

野崎治男「階級概念の論理的性格」（立命館大学人文科学研究所紀要、8号、1960年、および11号、1962年）

小山陽一「階級と社会体制」（「現代社会学講座」、I、有斐閣、1964年）

(14) Академия Наук СССР, Указ. соч. стр. 25

(15) Grant 前掲訳書、23、25頁

(16) Андреева, Указ. соч. стр. 3133～134

- (17) Семенов, 前掲訳書、267頁
- (18) Андреева, Указ. соч. стр. 135
- (19) Там же, стр. 136
- (20) Delille, 前掲訳書、30～31頁
- (21) Grant, 前掲訳書、20～21頁
- (22) 「論集」、11巻 2号、12頁
- (23) Андреева, Указ. соч. стр. 3137～139

3. 「中間層」のプロレタリア化

このような中間層中部の各要素についての個別的具体的な分析をなす前に、なによりもまず必要なのは、「旧中間層」と「新中間層」の区別である。セミーノフは、マルクスとエンゲルスが中間層の間に「異なった、対立さえしている発展諸傾向」を指摘していると強調して、農民と小ブルジョワジーにおいては<減少>、職員やインテリゲンチヤについては<増加>という「まったくちがった合法則性」が作用していると述べている。⁽²⁴⁾ アンドレーエヴァも、他のマルクス主義者と同じく、このことを確認しているが、シュネエルソンやアレクサンドロフ他の場合のようにオリジナルな資料によるよりも、むしろグラントとドリーユを通じて、イギリスとフランスの現状における主要な傾向をとらえている。

まず、「旧中間層」についていえば、通常これは、前資本主義的生産様式の存続にもとづく問題と考えられている。「<純粋な>構成体(《чистая》формация)というものはありえない」のであって、各構成体には古い構成体の「残滓(остаток)」や「遺物(пережиток)」が存続しているというところから、中間層の理論的問題が源を発していると、シュネエルソンが云うのも、この意味である。⁽²⁵⁾ したがって、この<残滓>としての旧中間層——農民・手工業者・小商業者——は、資本主義的生産の発展・高度化、とくに独占資本の肥大成長に伴って衰退し、<プロレタリア化>せざるをえない。アンドレーエヴァも、このマルクス主義的理論の正当さを、あらためて主張する。もっとも、たとえばフランスでは、イギリスよりは資本の集中化が緩慢であったために、手工業者と

小商業者は比較的根強く残っている。そしてブーヴィエ＝アジャムが指摘するように、ある条件下では一時的に増加さえしうる。⁽²⁶⁾ アンレーエヴァも、小企業者 (мелкий предприматель) の数の減少への傾向が「絶対的ではない (не абсолютный)」ことを認め、だからこそ一方では集中化への抵抗が、他方では労働者階級への偏見が強く残っており、ファシスト的要素の強い雑多な「社会的デマゴギーのための足場」とされやすく、同時に、この層に対する「社会主義的アジェンダの難しさ」があると指摘している。しかし、統計資料によってみても、「独占資本主義の枠内でのその生存が、どのみち没落へと運命づけられている」という「共通の傾向」が作用していることの「あざやかな例証」が示される。そして、こうした例証は、階級および階級闘争のマルクス主義理論の基本的見地の一つを「あらためて擁護」すると同時に、マルクス主義理論の発展への重要な貢献をなすとされる。というのは、「旧中間層」の利害が「プロレタリアートの利害と事実上結びついている」ことと、労働者階級によって指導される「統一的反独占陣営にその成員を導き入れるべき政治的位置」が用意されていることを、それが明かにするからである。⁽²⁷⁾

他方、「新中間層」——職員層・インテリゲンチヤ——については、「別の共通な発展傾向」、つまり「無条件的な数的増大」が認められ、このことは、すでにレーニンによって、「衰えゆく小生産者」に代る「新しい中間的身分 (новое среднее сословие)」の出現として指摘されたところである。⁽²⁸⁾ アンドレーエヴァはこの層の増大の要因として、

- (1) 国家独占資本主義の発展 (→とくに公務員の増大)
- (2) 生産の機械化・オートメ化 (→とくに技術者・技能員の増大)
- (3) 資本主義の腐朽による寄生的要素の成長 (→とくに広告・サービス・金融・保険などの部分の成長)

をあげている。⁽²⁹⁾ さらに、このアンドレーエヴァの列举を補うとすれば、独占資本の成長に伴う官僚制機構の肥大 (→事務職員の増大) をつけ加えねばなるまい。いずれにせよ、この層の成長肥大が資本主義の高度化に伴って生じたことは、周知のとおりである。

しかし、この層の客観的条件と、したがって基本的な利害は、プロレタリアートのそれに近づいている。たとえば、インテリゲンチヤの重要部分をなす<自由職業>者 (лиц «свободных профессий») にしても、今日ではその大部分が実質的には職員 (служащий) であり、雇用された勤労者 (нанимаемый работник) となりつつあり、その状態は、小ブルジョワジーのそれよりも労働者階級のそれにいっそう近づく。それに、この層がもつ「影響力」や「社会主義社会建設への貢献能力」を考え合わせれば、中間層の中の「もっとも重要な間層 (прослойка)」であるといってよい。ただし、この層は、「特に密度の高いイデオロギー的闘争に入りこむ」だけに、その中で社会主義的アジテーションにあたっては、社会主義思想の「高潔さ」と「意義深さ」を示すことがきわめて重要であることはグラントも強調する通りである。⁽³⁰⁾

この<自由職業>者よりもはるかに数的比重の大きい層は、もちろん、事務および販売部門に働く職員群である。したがって、「中間層の雑多な成員との行動の統一」の達成にとって、「この集団の状態の理論的分析が必要で」あり、すでにその問題は、「平和と社会主義の諸問題」誌上の国際的討論においてとりあげられている。その場合、問題は、それが中間層と労働者階級のいずれに属すると解すべきか、という形で提起された。周知のように、それは、かなり重要な理論上の問題点を明かにして、論争をひき起こした。この討論の総括の中で、同誌編集部は、「労働者階級の経済的・社会的境界」の決定が「いちばんむずかしかったことの一つ」であったと指摘し、若干の新しい現象——とくに「一部中間勤労者」の階級的所属をめぐるちがった意見が現われたことを強調して、結論として、この層が「プロレタリア化」し、「ますます労働者階級と融合する傾向」にあることを確認するに止まっている。⁽³¹⁾ その際、たとえば、ソ連邦科学アカデミーの世界経済・国際関係研究所の回答では、従事する労働が生産的であれ非生産的であれ、職員層の大多数は、労働の社会的組織の中で役割という立場からすれば、「労働者の地位と少しもかわらない」し、彼らの労働もやはり「必要労働と剰余労働に分れて」おり、その労働の「大部分は、支払われずに、資本家に占有される」と述べられ、⁽³²⁾ また Л. А. レオンチ

エフも、マルクス・レーニン主義的な意味でのプロレタリアートは、「賃金所得者のすべての部類」を含むとして、職員層もまた、「自分の労働力を売らねばならず、資本家的企業家（集团的資本家としてのブルジョワ国家をもふくめて）に搾取され、剰余価値を生産し、したがって、資本の自己増殖に奉仕している」と主張した。⁽³³⁾ これに対して、セミヨノフは、職員層は、剰余価値を「直接に生産」する労働者階級とは「本質的に異なっており、むしろ「生産で搾取機能をおこなう」と指摘し、それらを混同することは、「プロレタリアートだけに特有」な特徴や能力を職員層に認めることであり、その場合は共産主義運動の戦略・戦術を「再検討」しなければならないと警告した。⁽³⁴⁾

この論争について、アンドレーエヴァは、職員層の状態に生じつつある諸過程が、「大いに複雑」であるが、問題そのものは「いっそうの研究を要する」と前置きしたうえで、この討論では、職員の（А）経済的特徴（экономический признак）と（В）政治的位置（политическая позиция）という、問題の「異なった二つの部分」がもっと正確に区別さるべきであったと指摘する。アンドレーエヴァの見解によれば、職員の「社会的本性（социальной природы）」そのものは不変で、生産における場所（место）を労働者とは異にしており、「剰余価値の分配の領域」で働くゆえに、それを労働者階級の範疇に＜数え入れる＞べき「なんらの理由もない」のである。しかし、労働の機械化とオートメ化の社会的諸結果は、職員層にとっても労働者にとっても、「同じ」であり、したがって、「反独占闘争における職員層の政治的位置」については「なんらの疑問もない」といわねばならず、独占資本主義との闘争という「共通の目標」について語ることは「充分に理由がある」といわねばならない。⁽³⁵⁾

アンドレーエヴァのこうした把握は、基本的には正しいと思われる。「新中間層」の経済的・政治的諸条件は、労働者階級一般のそれと共通のものを多くふくんでいるし、その意味で、それが＜反独占＞の統一闘争に加わるべき客観的理由は充分に存在している。とくに、わが国の場合はこのことが妥当し、現に、日本の労働運動と大衆運動における＜ホワイトカラー＞の存在は、決して無視できない力となっている。しかし、こうした大ざっぱな把握のみにもとず

いて実践的プログラムを設定することはできないし、アンドレーエヴァ自身もそうは考えないであろう。なぜなら「新中間層」をめぐる理論的諸問題が、いぜんとして多く残されているからである。

たとえば、ここでとくにふれられている「自由職業者」についてみても、この特殊な集団を対象とする社会主義的文化活動の重要性というまでもないが、そのうちどれだけが「雇用された勤労者」であるのか、また、「雇用された」自由職業者と職員の間にはどのような類似と相異があるのか——こうした問題はなお検討を要するし、また「インテリゲンチヤ」の中に技術者・教師をふくめるとすれば、それらと「自由職業者」の間には、量的比重と社会的特性においていかなる相異があるのか、さらに、「技術者」を「職員」から区別することにはどういう理由と意義があるのか——こうしたことも、十分に明かにする必要がある。それにまた、「インテリゲンチヤ (интеллигенция)」という概念自体が、必ずしも一義的な明確性をもたないのである。この概念の歴史的起源についてはすでによく知られており、⁽³⁶⁾ 今日では、そうした本来の意味内容から離れていっそう広く用いられているが、社会科学用語としてのその現代的な定義は、ソビエトにおいてすら、かなり曖昧なようにみえる。たとえば、シュネエルソンは、今日ではそれが「大体において」賃金によって生計を立てる「雇用労働軍の特殊部分 (своеобразный часть армия наемного труда)」であり、「職員層の特別分隊 (особый отряд служащих)」であり、また「職員層の中でも高給を受け、比較的に特権的な位置にある部分」であると述べている。そしてそれは「ブルジョワジーとプロレタリアートの間の単なる間層 (прослойка)」であり、一部は前者に、他の部は後者にいっそう近く、したがって「階級的集団としてのその中間的な状態」によって特徴づけられると規定されている。⁽³⁷⁾ またアンバルド・ウーモフによれば、インテリゲンチヤとは「知的労働に専門的に従事する人々の特殊な社会層」であって、この定義の根底には、生産手段との関係よりもむしろ「労働の特徴」が横たわっており、プロレタリアートやブルジョワジーとは別の次元 (порядок) に属する社会的カテゴリーにはかならないという。⁽³⁸⁾ これもまた、あいまいな定義である。いずれにしても、レーニンと

同様に、＜階級＞ならざる＜層＞としてみなす点では、両者共通であるが、もし「職員層の特別分隊」にすぎぬならば、それを職員層と同列に対置することは不要であるし、またもし、「ブルジョワジーやプロレタリアートとは別個の次元」の存在であるなら、明らかに生産手段との一定の関係によって規定さるべき「旧中間層」とこれを同列に対置することは矛盾であろう。このように、「インテリゲンチヤ」の概念とその階級構成における位置づけについては、あらためて吟味を要すると考えざるをえないのである。⁽³⁹⁾

他方、「職員層」についてのアンドレーエヴァの位置づけは、セミョーノフのそれと基本的には同じであるが、これを無条件に肯定することもやや困難である。彼が、この層の階級的所属をめぐる論争に論及しつつ、＜経済的特徴＞と＜政治的位置＞の区別への注意を喚起したことは示唆に富むが、単に剰余価値の＜分配＞の領域で働くという理由のみによって、この層を労働者階級にふくめないことにたいしては、われわれは疑問を抱かざるをえない。なぜなら、マルクスの階級概念の最大の特質と意義は、そのメルクマールを＜生産手段との関係＞に求めるという一事にあり、レーニンの定義もまたそれに従っているからである。この基本的・第一次的メルクマールに比べれば、＜剰余価値の生産との関係＞は、むしろ副次的・第二次的な意義しかもたない。それは、ただ労働者階級中の＜基幹的＞部分とそれを区別せしめるにすぎないのである。したがってこの観点に立つかぎり、われわれは、むしろレオンチェフの見解を支持して、職員層の少なくとも大部分は労働者階級中のサブ・カテゴリーとみなすべきだと考え、こうした＜労働者＞の比重が、漸次的にせよ相対的に増大しつつあるというところに、労働者階級自体に生じた＜変化＞の一つをみるのである。

しかし、それだからといって、この＜労働者＞の＜特殊性＞を無視ないし軽視してはならない。もし、労働者階級内部のそうした個別的特殊性の具体的認識を欠くなら、＜基幹的＞プロレタリアートの周辺に他の諸社会的カテゴリーを＜結集＞することは、かえって困難となるであろう。＜統一＞は＜相異＞をつねに前提として具体化されねばならないのである。

ただし、こうした特殊性の認識にさいしては、＜剰余価値の生産との関係＞の考慮だけでは充分とはいえず、いわば労働形態および労働条件その他にかんするインテンシヴな認識をも含まねばならない。また、アンドレーエヴァは、「労働の機械化とオートメ化の社会的諸結果」が、職員層にとっても他の労働者にとっても「同じ」であるとみなすが、それは簡単には断定できない。ましてや、そこから単純に、「反独占闘争における職員層の政治的位置」については「なんらの疑問もない」という結論を引き出すことはできないであろう。職員層が政治行動において＜反独占＞闘争に加わるとすれば、それはなによりまず、彼らもまた＜労働者＞であるという共通の＜経済的＞条件によって規定されるのだと考えるべきであり、労働の機械化とオートメ化の形態と速度において、職員層と他の労働者の間にはなんらかの差異があるとすれば、それはむしろ、両者の意識と行動にたいして異なる規定を与えるはずなのである。実際には、一般的にいえば、少くとも現在において、職員層と他の労働者——とくに＜基幹的＞プロレタリアートの間には、政治的志向における若干の相異が存在する。なによりまず重要なのは、多くの調査が示すように、職員層が（われわれの見解によれば）労働者であるにもかかわらず＜階級意識＞をあまり明確にもたないという事実であり、またこの集団は、赤裸な反動的イデオロギーに異和感を比較的抱くことが多い反面で、＜反独占＞とは異なる方向を目指す諸政治思想——社会民主主義をふくめての——、あるいは＜無関心＞のとりことなりやすいという事実である。これは、いわゆる＜帰属意識＞や＜準拠集団＞などの問題にかかわるものであるが、同時に当然のことながら、その客観的な社会的諸条件の問題である。したがって、職員層の「政治的位置」を論ずるにあたっては、むしろ＜反独占＞闘争へのその参加を阻害する諸要因を明らかにすべきなのである。

註 24 Семенов, 前掲訳書、267、269頁

25 Шнейерсон, Указ. соч. стр. 3

26 M. Bouvier-Ajam, Les «nouvelles» classes moyennes en France (Cahiers du communisme, juillet-août, 1960、小出峻訳、「労働者階級と中間階級」(新日本出版社、1961)所収

- 27) Андреева, Указ. соч. стр. 141~143
- 28) Там же, стр. 143
- 29) Там же, стр. 136
- 30) Там же, стр. 144~145
- 31) 「平和と社会主義の諸問題」、1960年 5月号、76~79頁
- 32) 前掲誌、1960年 9月号、110頁
- 33) 前掲誌、1961年 5月号、116頁
- 34) 前掲誌、1961年 5月号、106~109頁
- 35) Андреева, Указ. соч. стр. 146~147
- 36) 村井研治「ロシア・インテリゲンチヤ」(奈良学芸大学紀要、人文・社会科学第11巻、1963)
小関三平「十九世紀ロシア・ニヒリストの一原像」(ソシオロジ、35・36合併号、1964) など参照。
- 37) Шнеерсон, Указ. соч. стр. 74~75
- 38) Академия Наук СССР, Указ. соч. стр. 236
- 39) この問題は、いっそう検討のうえ、あらためて論ずることにする。

4. 「中間層」と反独占カンパニヤ

だが、ともあれアンドレーエヴァの結論によれば、「旧中間層」と「新中間層」は、＜減少＞と＜増大＞という異なる傾向にもかかわらず、いずれもその社会的諸条件において労働者階級に接近しつつあると把握される。したがって、中間層が「労働者階級の周辺に結集する」ことの「客観的基礎」がそこに準備されている。それが自らの内部に労働者階級もブルジョワジーも「のみ込んで」しまい、階級対立の「苛烈さを解消させる」というブルジョワ的・改良主義的理論は誤りであり、現に中間層は、「平和と民主主義と社会主義を目指す闘争」において労働者の側に立って資本主義的独占に抗しつつあり、「ますます積極的に」闘争に参加していると、アンドレーエヴァは強調する。このような情勢判断は、他のソビエト学者にも共通しており、アルダーエフとヴェーベルも、「中間層のプロレタリア化」が「広く深く」おこなわれ、こうした経済的立場の変化こそ、中間層を「プロレタリアートの味方に引き入れることにたいする客観的前提」となるもので、プロレタリアートの周囲への中間層の結

集のための「ますます有利な条件」が実現されていると評価している。⁽⁴¹⁾

しかし——とアンドレーエヴァは注意をうながす——、労働者階級の周囲へ
の中間層の結集の客観的な<可能性 (возможность)>と<現実性 (действительность)>とは同じでない。この可能性が現実性に「転化」するには「一連の諸条件」が必要であり、その中でもっとも重要なものは、「労働者階級自身の行動の統一」にはかならない。それなくしては、左翼陣営の行動の統一も実現されないからである。⁽⁴²⁾

ところが、たとえばイタリア共産党第9回大会テーゼに指摘されているような「非プロレタリア的諸集団との接近と協力」のための「新しき方法」と行動の「幅広さと柔軟さ」にたいする必要ということを、修正主義者たちは「すりかえようと」試みており、イギリス共産党の<少数派>は、1956年に、共産党の<譲歩>による労働党との<合併>が左翼運動の統一強化のために必要だと主張している。⁽⁴³⁾しかし、「社会主義者の間のあらゆる健全な諸勢力との協力」が重要であるにしても、労働者階級の統一的な党の形成のためには、その基礎として「運動の大多数をマルクス主義的立場に獲得する」ことが前提とならねばならず、したがって必要なのはなによりまず「共産党自身の強化」なのであると、アンドレーエヴァ論文は強調する。このことは、当然イギリス労働党内の改良主義的イデオロギーとの闘争を弱めるどころか、かえて強めることを要求するのであって、この意味からも、階級闘争における中間層の役割についての「改良主義的修正主義的歪曲」との闘争の問題は、イデオロギー闘争の「真に緊要な問題」といわねばならない——と、アンドレーエヴァは言葉を結んでいる。⁽⁴⁴⁾

われわれは、とくにここで例としてあげられているイギリス共産党内の<少数派>問題についてのインフォメーションを欠いており、それについての論評を断念せねばならない。しかし、労働者階級と中間層の「政治的同盟」の可能性と現実性にかんするアンドレーエヴァの指摘と注意は、示唆に富んだ重要なものと考えられる。労働者階級と「旧中間層」および「新中間層」の利害の共通性が強まり、それらの<反独占>統一闘争への結集に必要な客観的基礎が現

われつつあることは十分に肯定されるし、また労働者階級自身の統一、および真の社会主義政党の統一が強化されることの重要性も、論をまたないところである。

とはいえ、この問題についてのアンドレーエヴァのこうした短かい分析だけで、すべてがつくされとは考えることができない。まず第1に、＜反独占＞闘争の統一的基礎についていえば、「大独占体による圧迫は民族の各階層にますます重くのしかかって」おり、独占体の支配をなくすことへの「切実な関心」が高まって、すべての勢力を団結させるために「有利な条件」が生れていると81カ国声明が判断しているにしても、各資本主義社会の具体的・個別的な諸条件が必ずしも同じでないことはいうまでもない。また、「有利」な「客観的基礎」の具体的な現象形態は、新・旧両中間層の間で、あるいはそのそれぞれの内部で、若干の相異があるにちがいない。そして第2には、こうした「有利な条件」の増大にもかかわらず、いわば「不利」な条件ないし阻害的諸要因も存在し、その現象形態もまた、中間層の内部諸カテゴリーの相違に応じてありうる。「改良主義・修正主義」への「譲歩」にたいする主張の強化も、そうした「不利な条件」の一つと考えられるが、いずれしても阻害的諸要因の存在を認識し、その＜客観的＞基礎をも追求しなければ、運動と組織の拡大と発展はさまたげられよう。さらに第3には、「有利」あるいは「不利」いずれの条件にしても、それらが政治的志向・行動を規定する社会的・心理的過程はかなり複雑であり、いくつもの＜媒介項＞を通じて具体的な規定がなされと考えられる。「経済的特徴」とくに客観的な階級所属だけが直接的に意識を決定しつくすわけでもなければ、また、すべての大衆的政治カンパニヤの高まりが、必ずしも＜反独占＞闘争の強化という「共通の目標」を目指すとも限らない。したがって、現状の分析にさいしては、政治的行動が規定されるに到る複雑な社会的・心理的過程の具体的な解明が重要となるのである。この意味では、たとえば、「修正主義・改良主義」を単に批判するだけでは充分ではなく、それらが、どのような社会的カテゴリーに、どのような仕方で、なぜ影響力を持つのかということを追求すべきであろう。

これらの理論的諸問題は、もちろん簡単には解明されないであろう。それは、きわめて多くの作業ときわめて長い時間を要するにちがいない。この章でとりあげたアンドレーエヴァの論文は、これまでの主要な理論上の諸問題を簡潔に集約・整理すると同時に、こうした未解決の課題の存在を暗に示唆しているのである。もちろん、彼のこの短い論文が、そのまま、この領域におけるソビエトの研究——あるいはもっと広く言えば、マルクス主義的階級理論における「中間層」研究の国際的成果のすべてを、十分に＜代表＞しているとはいえないであろう。しかし、それは、あらためて「中間層研究」の問題意識と基本原則を思い起させてくれるに充分であり、われわれはここから多くの反省と発展の手がかりを得て、自らの「中間層」研究の立場を、次章で示すことができるのである。

(‘65. 1. 12) [本稿未完]

註 (40) Андреева, Указ. соч. стр. 147

(41) Академия Наука СССР, Указ. соч стр. 62

(42) Андреева, Указ. соч. стр. 147

(43) Там же. стр. 148~150

(44) Там же. стр. 152~153

Theoretical Problems of the "Middle Class" Study in the light of Sociology of Social Class

II. Some Problems of the "Middle Strata" Study in the USSR

Résumé

In the sociology of the USSR, the studies on the "middle strata" in the capitalist societies are gradually prospering.

Here we examine these "middle strata" studies in the USSR, taking as an example Г. М. Андреева's short paper, entitled "Struggle of the marxism-leninism against the reformist theories of the 'middle class'" (1953).

His conclusions are as follows:

- (1) The intermediate categories within the class structure in the capitalist societies should be rather considered as the "middle strata".
- (2) The socio-economic conditions of the middle strata are becoming closer to those of the working class.
- (3) Both of the "new" middle strata and the "old" middle strata are gradually participating in the "anti-monopoly struggle" led by the working class.
- (4) The most important factor to enforce the "anti-monopoly struggle" is the unity of the working class.

As regards the fundamental points we agree to his arguments. In our opinion, however, there are some theoretical problems which are not yet solved. Especially we argue the following points:

- (1) His concept of the social stratum (слой) is vague, and

he does not clearly distinguish the concept of the social stratum from that of the social class.

- (2) There are no reason to exclude the so-called "white-collar employees" (служащий) from the category of the working class.
- (3) It is necessary to examine not only the positive factors for the alliance between the working class and the middle strata for the "anti-monopoly struggle", but also the negative factors for it.

In conclusion, we must further analyze concretely in details each individual category of the middle strata under the various historical conditions of every capitalist societies. In order to fulfill this aim, we would like to develop our own theoretical scheme for the studies of the middle strata problem in the next chapters. (Continued)